

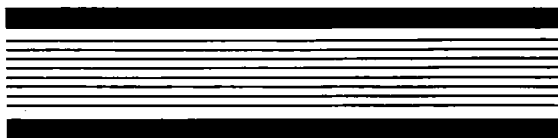
日本文学全集
21

横光利一・中山義秀

機械・寝園・紋章
厚物咲・碑・テニヤンの末日・咲庵

河出書房

横光利一・中山義秀



カラー版日本文学全集 21

1969©

昭和四十四年八月二十日 初版印刷
昭和四十四年八月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者	横光利一 中山義秀
発行者	中島隆之
印刷者	草刈龍平
装幀者	亀倉雄策
本文印刷	中央精版印刷株式会社
口絵印刷	凸版印刷株式会社
製本	加藤製本株式会社
製函	加藤製函印刷株式会社
本文用紙	本州製紙株式会社
クロース	日本クロース工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

橫光利一

機械……………五

寢園……………二

紋章……………101

中山義秀

厚物咲……………122

碑……………121

テニヤンの末日……………二七五

咲庵……………三〇三

注釈・年譜……………三二

解説……………四三

巻頭写真……………

色刷挿絵……………

機械……………

寝園……………

紋章……………

厚物咲・碑……………

テニヤンの末日……………

咲庵……………

羽石光志……………

渡辺学……………

井上長三郎……………

織田広喜……………

森田元子……………

榊原和夫……………

小久保実……………

保昌正夫……………

橫
光
利
一

機

械

初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかときどき思った。観察しているがまだ三つにもならない彼の子供が彼を嫌がるからと云って、親父を嫌がる法があるかと云って怒っている。畳の上をよちよち歩いているその子供がぼったり倒れると、いきなり自分の細君を殴りつけながらお前が番をしていて子供を倒すと云うことがあるかと云う。見ているとまるで喜劇だが本人がそれで正気だから、反対にこれは狂人ではないのかと思うのだ。少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかえて部屋の中を駆け廻っている四十男。この主人はそんなに子供のことはかりにかけてそうかと云うとそうではなく、凡そ何事にもそれ程な無邪気さを持っているので自然に細君がこの家の中心になって来ているのだ。家の中の運転が細君を中心にして来ると細君系の人々がそれだけのびのびとなって来るのもっともな事なのだ。従ってどちらかと云うと主人の方に関係のある私は、この家の仕事のうちで一番人のいやがることばかりを引き受けねばならぬ結果になっていく。いやな仕事、それは全くだいじやない仕事で、しかもそのいやな部分を誰か一人がいつもしていなければ家全体の生活が廻らぬと云う中心的な部分に私がいるので、実は家の中心が細君ではなく私にあるのだが、そんなことを云ったっていやな仕事をする奴は使い道のない奴だからこそだとはかり思っている人間の集りだから、黙っているより仕方がないと思っていた。全く使い道のない人間と云うものは誰にも出来かねる箇所だけに不思議に使い道のあるもので、このネームプレート製造所でもいろいろな薬品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕事だけは特に劇薬ばかりで満ちていて、わざわざ使い道のない人間を落し込む穴のように出来上っているのである。この穴へ落ち込む

と金属を腐蝕させる塩化鉄で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺戟で咽喉を破壊し夜の睡眠がとれなくなるばかりでなく、頭脳の組織が変化して来て視力さえも薄れて来る。こんな危険な穴の中へは有用な人間が落ち込む筈がないのであるが、この家の主人も若いときに人の出来なないこの仕事を覚え込んだのも恐らく私のように使い道のない人間だったからにちがいないのだ。しかし、私とていつまでもここで片輪になるために愚図ついていたのでは勿論ない。実は私は九州の造船所から出て来たのだがふと途中の汽車の中で一人の婦人に逢ったのがこの生活の初めなのだ。婦人はもう五十歳あまりになっていて主人に死なれ家もなければ子供もないので、東京の親戚の所で暫く厄介になってから下宿屋でも始めるのだと云う。それなら私も職でも見つかればあなたの下宿へ厄介になりたいと冗談のつもりで云うと、それでは自分のこれから行く親戚へ自分といつてその仕事を手伝わないかとすすめてくれた。私もまだどこへ勤めるあてとてもないときだし、ひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用する気になってそのままふらりと婦人と一緒にこの仕事場へ流れ込んで来たのである。すると、この仕事は初めは見た目は楽だがだんだん薬品が労働力を根柢から奪っていくと云うことに気がついた。それで今日が出よう明日は出ようと思っていくと云うことに気がついた。それではそれでひとつこの仕事の急所を全部覚え込んでからにしようと思ふと云う気にもなつて来て、自分で危険な仕事に近づくことに興味を持つと云うとつとめ出した。ところが私と一緒に働いているこの職人の軽部は、私がこの家の仕事の秘密を盗みに這入って来たところの男者だと思ひ込んだのだ。彼は主人の細君の実家の隣家から来ている男なので何事にも自由がきくだけにそれだけ主家が第一で、よくある忠実な下僕になりすましてみることが道楽なのだ。彼は私が棚の毒薬を手にとつて眺めているともう眼を光らせて私を見詰めている。私が暗室の前をうろついているともうかたかたと音を立てて自分がここから見ているぞと知らせてくれる。全く私にとっては馬鹿馬鹿しい事だが、そ

れでも輕部としては真剣なんだから無氣味である。彼にとつては活動写真が人生最高の教科書で従つて探偵劇が彼には現実とどこも変らぬものに見えているので、このふらりと這入つて来た私がそう云う彼には、また好個の探偵物の材料になつて迫っているのも事実なのだ。ことに輕部は一生この家に勤める決心ばかりではない。ここの分家としてやがては一人でネームプレート製造所を起そうと思つてゐるだけに、自分よりさきに主人の考案した赤色プレート製法の秘密を私に奪われて了うことは本望ではないにちがいない。しかし、私にしてみればただこの仕事を覚え込んでおくだけでそれで生活の活計を立てようなどとは謀んでゐるのでは決してないのだが、そんなことを云つたつて輕部には分るものでもなし、また私がこの仕事を覚え込んで了つたならあるいはひょっこりそれで生計を立ていかぬとも限らぬし、いづれにしても輕部なんか何が何をおもうとただ彼をいらいらさせてみるのも彼に人間修養をさせてやるだけだとぐらゐに思つておればそれで宜しい、そう思つた私はまるで輕部を眼中におかずにいると、その間に彼の私に対する敵意は急速な調子で進んでいて、この馬鹿がと思つていたのも実は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思わしめるようにまでなつて来た。人間は敵でもないのに人から敵だと思われすることは、その期間相手を馬鹿にしていられるだけ何となく楽しみなものであるが、その楽しみが実はこちらの空隙になつてゐることはなかなか氣附かぬもので、私が何の氣もなく椅子を動かしたり断裁機を廻したりしかけると不意に金槌が頭の上から落つて来たり、地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり、安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危険な重クロムサンの酸液と入れ換えられていたりしてゐるのが、初めの間はこちらの過失だとばかり思つていたのにそれが、^{かく}盡く輕部の仕業だと氣附いた時には、考えれば考えるほどこれは油断をしてゐると生命まで狙われてゐるのではないかと思はれて来てひやりとさせられるようになって来た。ことに輕部は馬鹿は馬鹿でも私よりも先輩で劇業の調査にかけては腕があ

り、お茶に入れておいた重クロム酸アンモニアを相手が飲んで死んでも自殺になるぐらゐのことを知つてゐるのだ。私は御飯を食べる時でもそれから当分の間は黄色な物が眼につくとそれが重クロムサンではないかと思はれて箸がその方へ動かなかつたが、私のそんな警戒心も暫くすると自分ながら滑稽になつて来てそう容易く殺されるものなら殺されてもみようと思ふようにもなり、自然に輕部の事などは又私の頭から去つていった。

或る日私は仕事場で仕事をしてゐると主婦が来て主人が地金を買いくのだから私も一緒にいて行つて主人の金銭を絶えず私が持つていくれるようにと云う。それは主人は金銭を持つと殆ど必ず途中で落して了うので主婦の氣遣ひは主人に金銭を渡さぬことが第一であつたのだ。いままでのこの家の悲劇の大部分も実にこの馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにこの主人は金銭を落すのか誰にも分らない。落して了つたものはいくら叱つたつて嚇したつて返つて来るものでもなし、それだから汗水たらして皆が働いたものを一人の神經の弛みのため、^{かく}盡く水の泡にされて了つてそのまゝ泣き寝入に黙つてゐるわけにもいかず、それが一度や二度ならともかく始終持つたら落すと云うことの方が確実だと云うのだから、この家の活動も自然に鍛鍊のされ方が普通の家とはどこか違つて成長して來てゐるに違ひないのだ。いつたい私達は金銭を持つたら落すと云う四十男をそんなに想像することは出来ない。譬へば財布を細君が紐でしっかり首から懷へ吊しておいてもそれでも中の金銭だけはちゃんといつも落ちてあると云うのであるが、それなら主人は金を財布から出すときか入れる時かに落すにちがいないとしてみても、それにしても第一そう度々落す以上は今度は落すかもしれぬからと三度に一度は出すときや入るときに氣附く筈だ。それを氣附けば事實はそんなにも落さないのではないかと思はれて考えようによつてはこれは或いは金銭の支払いを延ばすための細君の手ではないかとも一度は思うが、しかも間もなくあまり變つてゐる主人の拳動のために細君の宣伝もいつ

の間にか事実だと思つてしまわねばならぬほど、とにかく、主人は變つてゐる。金を金とも思わぬと云う言葉は富者に対する形容だがこの主人の貧しさは五銭の白銅を握つて錢湯の暖簾をくぐる程度に拘らず、困つてゐるものには自分の家の地金を買ひ金錢まで遣つてしまつて忘れてゐる。こう云うのをこそ昔は仙人と云つたのであらう。しかし、仙人と一緒にゐるものは絶えずはらはらして生きていかねばならぬのだ。家のことを何一つ任しておけないばかりではない、一人で済ませる用事も二人がかりで出かけたなり、その一人のゐるために周囲の者の勞力がどれほど無駄に費されてゐるか分らぬのだが、しかしそれはそうにちがいないとしてもこの主人のゐるのによつて得意先のこの家に対する人氣の相異は格段の變化を生じて来る。恐らくこの家は主人の爲に人から憎まれたことがないに違ひなく主人を縛る細君の締りがたとい悪評を立てたとしたところで、そんなに好人物の主人が細君に縛られて小さく忍んでゐる様子と云うものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなものでもあり、その細君の脱みの留守に脱兎の如く脱け出してはすつかり金錢を振り撒いて歸つて来る男と云うのもこれまた一層の人氣を立てる材料になるばかりなのだ。

そんな風な考えるとこの家の中心は矢張り細君にもなく私や輕部にもない自ら主人にあると云わねばならなくなつて来て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこから見たつて主人が私には好きなんだから仕様がな。實際私の家の主人はせいぜい五になった男の子をそのまま四十に持つて来た所を想像すると浮んで来る。私たちはそんな男を思うと全く馬鹿馬鹿しくて輕蔑したくなりそんなものにも拘らずそれが見ていて輕蔑出来ぬと云うのも、つまりはあんまり自分のいつの間にか成長して来た年齢の醜さが逆に鮮かに浮んで来てその自身の姿に打たれるからだ。こんなに自分への反射は私に限らず輕部になつて常に同じ作用をしてゐたと見えて、後で氣附いたことだが、輕部が私の反感も所詮はこの主人を守ろうとする輕部の善良な心の部分の働きからであつたのだ。私がここの家から離れがたなく感じるのも主

人のそのの上もない善良さからであり、輕部が私の頭の上から金鎧を落したりするのも主人のその善良さのためだとすると、善良なんて云うことは昔から案外良い働きをして来なかつたにちがいない。

さてその主人と私は地金を買ひにいって戻つて来るとその途中主人は私に今日はこう云う話があつたと云つて云うには、自分の家の赤色ブレートの製法を五万円で売つてくれと云うのだが売つて良いものかどうかどうするかと訊くので、私もそれには答えられずに黙つてゐると赤色ブレートもいつまでも誰れにも考案されないものならなくとも仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だと云う。それもそうだろうと思つても主人の長い苦心の結果の研究を私と云う。それと云う権利もなし、そうかと云つて主人ひとりに任かしておいては主人はいつの間にか細君の云うままになりそうだし、細君と云うものはまた目さきのことだけより考えないに決つてゐるのを思うと私もどうかして主人のためになるようにとそればかりがそれからの不思議に私の興味の中心になつて来た。家にいても家の中の動きや物品が尽く私の整理を待たねばならぬかのように映り出して来て輕部までがまるで私の家来のように見えて来たのは良いとしても、暇さえあれば覚えて来た弁士の声色ばかり唸つてゐる彼の様子までがうるさくなつた。しかし、それから間もなく反対に輕部の眼がまた激しく私の動作に敏感になつて来て仕事場にいるときは殆ど私から眼を放さなくなつたのを感じ出した。思うに輕部は主人の仕事の最近の経過や赤色ブレートの特許権に関する話を主婦から聞かされたにちがいないのだが、主婦まで輕部に私を監視せよと云いつけたのかどうかは私には分らなかつた。しかし、私までが主婦や輕部がいまにもしかするとこつそり主人の仕事の秘密を盗み出して売るのはないかと思つて幾分の監視さえする氣持ちになつたところから見ても、主婦や輕部が私を同様に疑う氣持ちはそんなに誤魔化してゐられるものではない。そこで私もそれらの疑いを抱く視線に見られると、不快は不快でも何となく面白くひとつどうすることか図々しくこちらにも逆に監視を続け

てやろうと云う氣になつて来て困り出した。^{*}丁度そう云う時また主人は私に主人の続けている新しい研究の話をして云うには、自分は地金を塩化鉄で腐蝕させずにそのまま黒色を出す方法を長らく研究しているのだが、いまだに思わしくないかないので、お前も暇なとき自分と一緒にやってみてくれないかと云うのである。私はいかに主人がお人好しだからと云つてそんな重大なことを他人に洩して良いものであろうかどうかと思ひながらも、全く私が根から信用されたことに對しては感謝をせずにはおれないのだ。いったい人と云うものは信用されて了つたらもうこちらの負けで、だから主人はいつでも周囲の者に勝ち続けているのであると一度は思つてみても、そう主人のように底抜けな馬鹿さにはなかなかなれるものではなく、そこがつまりは主人の豪いと云う理由になるのであるうと思つて私も主人の研究の手助けなら出来るだけのことはさせて貰ひたいと心底から礼を述べたのだが、人に心底から礼を述べさせると云うことを一度でもしてみたいと思うようになったのもそのときからだ。だが、私の主人は他人にどうかされるようななどとそんなけな考えなどはないのだからまた一層私の頭を下げさせるのだ。つまり私は暗示にかかった信徒みたいに主人の肉体から出て来る光りに射抜かれてしまったわけだ。奇蹟などと云うものは向うが奇蹟を行うのではなく自身の醜さが奇蹟を行うのにちがいない。それからと云うものは全く私も輕部のように何より主人が第一になり始め、主人を左右している細君の何に反感をさえ感じて来て、どうしてこう云う婦人がこの立派な主人を独專して良いものか疑わしくなつたばかりではなく出来ることならこの主人から細君を追放してみたく思うことさえときどきあるのを考えても輕部が私に虐くあたつてくる氣持ちが手にとるようになつて来て、彼を見ていると自然に自分を見ているようですますますまたそんなことにまで興味が湧いて来るのである。

或る日主人が私を暗室へ呼び込んだので這入つていくと、アニリン^{*}をかけた真鍮の地金をアルコールランプの上で熱しながらいきなり説

明して云うには、プレートの色を變化させるには何んでも熱するときの變化に一番注意しなければならぬ、いまはこの地金は紫色をしているがこれが黒褐色となりやがて黒色となるともうすでにこの地金が次の試験の場合に塩化鉄に敗けて役に立たなくなる約束をしているのだから、着色の工夫は総て色の變化の中段においてなさるべきだと教えておいて、私にその場でバーニング^{*}の試験を出来る限り多くの薬品を使用してやつてみよと云う。それから私の私は化合物と元素の有機關係を驗べることにまします興味を向けていったのだが、これは興味を持てば持つほど今迄知らなかつた無機物内の微妙な有機的運動の急所を読みとることが出来て来て、いかなる小さなことに機械のような法則が係数となつて実体を計つていかに氣附き出した私の唯心的な眼醒めの第一歩となつて来た。しかし輕部は前まで誰も這入ることを許されなかつた暗室の中へ自由に這入り出した私に氣がつくと、私を見る顔色までが變つて来た。あんなに早くから一にも主人二にも主人と思つて来た輕部にも拘らず新參の私に許されたことが彼に許されないのだからいままでの私への彼の警戒も何の役にも立たなくなつたばかりではない、うっかりすると彼の地位さえ私が自由に左右し出すのかもしれないと思つたにちがいないのだ。だから私は幾分彼に遠慮すべきだと云うぐらひは分つていても何もそういひいひ輕部輕部と彼の眼の色ばかりを氣使わねばならぬほどの人でもなし、いつものように輕部の奴といったいまにどんなことをし出すかとそんなことの方がかえつて興味が出来て来てなかなか同情なんかする氣にもなれないので、そのまま頭から見降ろすように知らぬ顔が続けていた。すると、よくよく輕部も腹が立つたと見えてあるとき輕部の使つていた穴ほぎ用のペルスを私が使おうとすると急に見えなくなつたので君がいまきまです使つていたではないかと云うと、使つていたつてなくなくなるものはないのだ、なければ見附かるまで自分で捜せば良いではないかと輕部は云う。それもそうだと思つて、私はペルスを自分で捜し続けたのだがどうしても見附からないのでそこでふと私は輕部のポケットを見

るとそこにちゃんとあつたので黙って取り出そうとすると、他人のポケットへ無断で手を入れる奴があるかと云う。他人のポケットはポケットでもこの作業場にいる間は誰のポケットだって同じことだと云うと、そう云う考えを持っている奴だからこそ主人の仕事だって図々しく盗めるのだと云う。いったい主人の仕事をいつ盗んだか、主人の仕事を手伝うと云うことが主人の仕事を盗むことなら君だって主人の仕事を手伝っているのではないかと云ってやると、彼は暫く黙ってぶるぶる唇をふるわせてから急に私にこの家を出ていけと迫り出した。それで私も出るには出るがもう暫く主人の研究が進んでからでも出ないと主人に対してすまないと云うと、それなら自分が先きに出ると云う。それでは君は主人を困らせるばかりで何にもならぬから私が出るまで出ないようにするべきだと云ってきかせてやっても、それでも頑固に出ると云う。それでは仕方がないから出ていくよう、後は私が二人分を引き受けよう」と云うと、いきなり軽部は傍にあつたカルシュームの粉末を私の顔に投げつけた。実は私は自分が悪いと云うことを百も承知しているのだが悪と云うものは何と云つたて面白い。軽部の善良な心がいらだちながら慄えているのをそんなにもまざまざと眼前で見せつけられると、私はますます舌舐めずりをして落ちついて来るのである。これではならぬと思ひながら軽部の心の少しでも休まるようにと仕向けてはみるのだが、だいいち初めから軽部を相手にしていなかつたのが悪いので彼が怒れば怒るほどこちらが恐ろしくにびくびくしていくと云うことは余程の人物でなければ出来るものではない。どうもつまらぬ人間ほど相手を怒らすことに骨を折るもので、私も軽部が怒れば怒るほど自分のつまらなさを計っているような気がして来て終いには自分の感情の置き場がなくなつて来始め、ますます軽部にはどうして良いのか分らなくなつて来た。全く私はこのときほどはつきりと自分を持てあましたことはない。まるで心は肉体と一緒にびったりとくっついたままの存在とはよくも名付けたと思える程心がただ黙々と身体の大きさに従つて存在しているだけなのだ。暫くして私はその

まま暗室へ這入ると仕かけておいた着色用のビスムチルを沈澱させた*め、試験管をとつてクロム酸加里を焼き始めたのだが軽部にとってはそれがまたいけなかつたのだ。私が自由に暗室へ這入ると云うことがすでに軽部の怨みを買つた原因だつたのにさんざん彼を怒らせた挙句の果に直ぐまた私が暗室へ這入つたのだから彼の逆上したのも尤もなことである。彼は暗室のドアを開けると私の首を持ったまま引き摺り出して床の上へ投げつけた。私は投げつけられたようにして殆ど自分から倒れる気持で倒れたのだが、私のようなものを困らせるのには全くそのように暴力だけよりないのであらう。軽部は私が試験管の中のクロム酸加里がこぼれたかどうかと見ている間、どうしたものか一度周章て部屋の中を駆け廻つてそれからまた私の前へ戻つて来ると、駆け廻つたことが何の役にもたつたかつたと見えてただ彼は私を睨みつけているだけなのである。しかしもし私が少しでも動けば彼は手持ち無沙汰のため私を蹴りつけるにちがいないと思つたので私はそのまゝいつまでも倒れていたのだが、切迫したいくらかの時間でもいったい自分は何をしているのだと思つたが最後もうほんやりと間の脱けて了うもので、ましてこちらは相手を一度思うさま怒らさねば駄目だと思つているときとても相手もすっかり気の向くまで怒つて了つた頃であらうと思ふといふ私も落ちついてやれやれと云う気になり、どれほど軽部の奴がさきから暴れたのかと思つてあたりを見廻すと一番ひどく荒されてゐるのは私の顔でカルシュームがざらざらしたまま肩から耳へまで這入っているのに気がついた。が、さて私はいつ起き上つて良いものかそれが分らぬ。私は断裁機からこぼれて私の鼻の先にくまア三日の間にこれだけの仕事で自分に出来たと驚いた。それで軽部にもうつまらぬ争いはやめて早くニュームにザボンを塗ろうではないかと云うと、軽部はもうそんな仕事はしたくはないのだ。それよりお前の顔を磨いてやろうと云つて横たわっている私の顔をアルミニュームの切片で埋め出し、その上から私の顔を洗うように揺り続けるの

だが、街に並んだ家々の戸口に番号をつけて貼りつけられたあの小さなネームプレートの山で磨かれている自分の顔を想像すると、所詮は何が恐ろしいと云って暴力ほど恐るべきものはないと思った。ニュームの角が揺れる度に顔面の皺や窪んだ骨に刺さってちくちくするだけではない。乾いたばかりの漆が顔にへばりついたまま離れないのだからやがて顔も膨れ上るにちがいないのだ。私ももうそれだけの暴力を黙って受けておれば軽部への義務も果たしたように思ったので起き上るとまた暗室の中へ這入ろうとした。すると軽部はまた私のその腕をもつて背中へ捻じ上げ、窓の傍まで押して来ると私の頭を窓硝子へぶちあてながら顔をガラスの突片で切ろうとした。もうやめるであろうと思っているのに予想とは反対にそんな風にならずとも追って来られると、今度はこの暴力がいつまで続くのであろうかと思ひ出していくものだ。しかしそうなればこちらもたとい悪いと思っても謝罪する気なんかはなくなるばかりでいままでも隙があれば仲直りをしようと思っていた表情さえますます苦々しくふくれて来て更に次の暴力を誘う動因を作り出すだけとなった。が、実は軽部ももう怒る気はそんなになくただ仕方がないので怒っているだけだと云うことは分っているのだ。それで私は軽部が私を窓の傍から劇薬の這入っている腐蝕用のバットの傍まで連れていくと、急に軽部の方へ向き返って、君は私をそんなに虐めるのは君の勝手だが私がいままでも暗室の中でしていた実験は他人のまだしたことの出来ない実験なので、もし成功すれば主人がどれほど利益を得るかしないのだ。君はそれも私にさせないばかりか苦心の末に作ったビスマチルの溶液までこぼしてしまつたではないか。拾え、と云うと軽部はそれならなぜ自分にもそれを一緒にさせないのだと云う。させるもさせないもないだいたい化学方程式さえ読めない者を実験を手伝わせたって邪魔になるだけなのだが、そんなことも云えないので少しやみだと思つたが暗室へ連れていって化学方程式を細く書いたノートを見せて説明し、これらの数字に従つて元素を組み合せてはやり直してばかりいる仕事が君に面白いならこれから毎日でも

私に代つてして貰おうと云うと、軽部は初めてそれから私に負け始めた。

軽部との争いも当分の間は起らなくなって私もいくらか前よりやすくなるかと暫くして、仕事が急激に軽部と私に増して来た。ある市役所からその全町のネームプレート五万枚を十日の間にせよと云つて来たので喜んだのは主婦だが私たちはそのため殆ど夜さえ眠れなくなるのは分つていたので。それで主人は同業の友人の製作所から手のすいた職人を一人借りて来て私たちの中へ混えながら仕事を始めることにした。初めの間は私たちは何の気もなくただ仕事の量に圧倒されてしまつて働いていたのだが、そのうちに新しく這入つて来た職人の屋敷と云う男の様子が何となく私の注意をひき始めた。無器用な手つきといい人を見るときの鋭い眼つきといい職人らしくはしているがこれは職人ではなくてもしかしたら製作所の秘密を盗みに来た廻し者ではないかと思つたのだ。しかし、そんなことを口にも出して饒舌たら軽部は屋敷をどんな目に逢わすかしないので暫く黙つて彼の様子を見ていることにしていると、屋敷の注意はいつも軽部の槽の揺り方にそがれているのを私は発見した。屋敷の仕事は真鍮の地金を苛性ソーダの溶液中に入れて軽部のすませて来た塩化鉄の腐蝕薬と一緒にそのとき用いたニスやグリユー^{*}を洗い落す役目なのだが、軽部の仕事の部分はここは製作所の二番目の特長の部分なので、他の製作所では真似することは出来ないのだからそこに見入る屋敷とて当然なことは当然だとしても疑つてある。しかし、軽部は屋敷に見入られているとますます得意になつて調子をとりつつ槽の中の塩化鉄の溶液を揺するのだ。いつものことなら私を疑り出したように軽部とて一応は屋敷を疑わねばならぬ筈なのにそれが事もあるうか軽部は屋敷に槽の揺り方を説明して、地金に書かれた文字と云うものはいつものこうしてうつ伏せにするもので、すべて金属と云うものは金属それ自身の重みのため

に負けるのだから文字以外の部分はそれだけ早く塩化鉄に侵されて腐

っていくのだと誰に聞いたものやらむずかしい口調で説明して屋敷に一度バットを掃すてみよとまで云う。私は初めはひやひやしなうながら黙って軽部の饒舌についていることを聞いていたのだがしまいに私は私で誰がどんな仕事の秘密を知ろうと知らせるだけ良いのではないかと思い出し、それからはもう屋敷への警戒もしないことに決めて了ったが、すべて秘密と云うものはその部分に働く者の慢心から洩れるのだと気がついたのはそのときの何よりの私の収穫であったであらう。それにしても軽部がそんなにうまく秘密を饒舌したのも彼のそのときの調子に乗った慢心だけではない。確に彼にそんなにも饒舌させた屋敷の風采が軽部の心をそのとき浮き上らせてしまったのに違いないのだ。屋敷の眼光は鋭いがそれが柔くと相手の心を分裂させてしまう不思議な魅力を持っているのである。その彼の魅力は絶えず私へも言葉や云う度に迫って来るのだが何にせよ私はあまりに急がしくて朝早くから瓦斯で熱した真鍮へ漆を塗りつけては乾かしたり重クロム酸アンモニアで塗りつめた金属板を日光に曝して感光させたりアニリンをかけてみたり、其他バーニングから炭とぎからアモビカルから断裁までくるくる廻ってし続けねばならぬので屋敷の魅力も何もあったものではないのである。すると五日目頃の夜中になってふと私が眼を醒すとまだ夜業を続けていた筈の屋敷が暗室から出て来て主婦の部屋の方へ這入っていった。今頃主婦の部屋へ何の用があるのであらうと思っているうちに惜しいことにはもう私は仕事の疲れで眠って了った。翌朝また眼を醒すと私に浮んで来た第一のことは昨夜の屋敷の様子であった。困ったことには考えているうちにそれは私の夢であったのか現実であったのか全く分らなくなって来たことだ。疲れているときには今までとてもしどき私にはそんなことがあったのだなおこんどの屋敷のことも私の夢かもしれないと思えるのだ。しかし屋敷が暗室へ這入った理由は想像出来なくはないが主婦の部屋へ這入っていった彼の理由は私には分らない。まさか屋敷と主婦とが私たちには分らぬ深い所で前から交渉を持ち続けていたとは思えないのだしこれは夢だと思

っている方が確実であらうと思っていると、その日の正午になって不意に主人が細君に昨夜何が変わったことがなかったかと笑いながら訊ね出した。すると細君は、お金をとったのはあなただぐらいのことはいくら寝坊の私だつて知っているのだ。盗るのならもっと上手にとつて貰いたいと澄まして云うと主人は一層大きな声で面白そうに笑い続けた。それでは昨夜主婦の部屋へ這入っていったのは屋敷ではなく主人だったのかと気がついたのだがいくらいつも金銭を持たされないからと云って夜中自分の細君の枕もとの財布を狙って忍び込む主人も主人だと思ひながら私もおかしくなり、暗室から出て来たのもそれではあなたかと主人に訊くと、いやそれは知らぬと主人は云う。では暗室から出て来たのだけは矢張り屋敷であらうかそれともその部分だけは夢なのであらうかとまた私は迷ひ出した。しかし、主婦の部屋へ這入り込んだ男が屋敷でなくて主人だと云うことだけは確に現実だったのだから暗室から出て来た屋敷の姿も全然夢だとばかりも思えなくなつて来て、一度消えた屋敷への疑いも反対にまただんだん深く進んで来た。しかしそう云う疑いと云うものはひとりで疑っていたのでは結局自分自身を疑っていくだけなので何の役にもたなくなるのは分っているのだ。それより直接屋敷に訊ねて見れば分るのだが、もし訊ねてそれが本当に屋敷だったら屋敷の困るのも決っている。この場合私が屋敷を困らしてみたとこで別に私の得になるではなしと云って捨てておくには事件は興味が有り過ぎて惜しいのだ。だいいち暗室の中には私の苦心を重ねた蒼鉛と珪酸ジルコニウムの化合物や、主人の得意とする無定形セレンウムの赤色塗の秘法が化学方程式となつて隠されているのである。それを知られてしまえばこの製作所にとっては莫大な損失であるばかりではない、私にしたつていままでの秘密は秘密ではなくなつて生活の面白さがなくなるのだ。向うが秘密を盗もうとするならこちらはそれを隠したつてかまわぬであらう。と思うと私は屋敷を一途に賊のように疑つていつてみようかと決心した。前には私は軽部からそのように疑われたのだが今度は自分が他人を疑う番になつた

のを感じると、あのとき軽部をその間馬鹿にしていた面白さを思い出してやがては私も屋敷に絶えずあんな面白さを感じさすのであるうかとそんなことまで考えながら、一度は人から馬鹿にされてもみなければとも思い直したりしてよいよ屋敷へ注意をそいでいった。ところが屋敷は屋敷で私の眼が光り出したと気付いたのであるうかそれから殆ど私と視線を合さなくてすませる方向ばかりに向き始めた。あまり今から窮屈な思いをさせてはかえって今の中に屋敷を逃がしてしまいうさうだしするので、なるだけのん気にしなければならぬと柔いのであるが眼と云うものは不思議なもので、同じ認識の高さでうつっている視線と云うものは一度合すると底まで同時に貫き合うのだ。そこで私はアモアピカルで真鍮を磨きながらよもやまの話をすすめ眼だけでも彼にもう方程式は盗んだかと訊いてみると向うでまだまだと応えるかのように光って来る。それでは早く盗めば良いではないかと云うとお前にそれを知られては時間がかかってしょうがないと云う。ところが俺の方程式は今の所まだ間違いだらけで盗ったって何の役にも立たぬぞというとなら俺が見て直してやろうと云う。そう云う風に暫く屋敷と私は仕事をしながら私自身の頭の中で黙って会話を続けているうちにだんだん私は一家のうちの誰よりも屋敷に親しみを感じ出した。前に軽部を有頂天にさせて秘密を饒舌らせてしまった彼の魅力が私へも次第に乗り移って来始めたのだ。私は屋敷と新聞を分け合って読んでいても共通の話題になると意見がいつも一致して進んでいく。化学の話になっても理解の速度や遅度が拮抗しながら滑らかにすべっていく。政治に関する見識でも社会に対する希望でも同じである。ただ私と彼との相違している所は他人の発明を盗み込みもうとする不道德な行為に關しての見解だけだ。だが、それと彼には彼の解釈の仕方があって発明方法を盗むと云うことは文化の進歩にとっては別に不道德なことではないと思っているにちがいない。実際、方法を盗むということは盗まぬ者より良い行為をしているのかもしれないのだ。現に主人の発明方法を暗室の中で隠そうと努力している私と盗もうと

努力している屋敷とを比較してみると屋敷の行為の方がそれだけ社会にとつては役立つことをしている結果になっていく。それを思うとそうしてそんな風に思わしめて来た屋敷を思うと、なおますます私には屋敷が親しく見え出すのだが、そうかと云って私は主人の創始した無定形セレンウムに関する染色方法だけは知らしたくはないのである。それ故絶えず一番屋敷と仲好くなった私が屋敷の邪魔もまた自然に誰より一番し続けているわけにもなっているのだ。

あるとき私は屋敷に自分がこへ這入って来た当時軽部から問者と疑われて危険な目に逢わされたことを話してみた。すると屋敷はそれなら軽部が自分にそう云うことをまだしない所から察すると多分君を疑って懲り懲りしたからであろうと笑いながら云って、しかしそれだから君は僕を早くから疑う習慣をつけたのだと彼は擲論した。それでは君は私から疑われたとそれほど早く気附くからには君も這入って来るなり私から疑われることに對してそれ程警戒する練習が出来ていたわけだと私が云うと、それはそうだと彼は云った。しかし、彼がそれはそうだと云ったのは自分は方法を盗みに来たのが目的だと云ったのと同様なものにも拘らず、それをそう云う大胆さには私とて驚かざるを得ないのだ。もしかすると彼は私を見抜いていて、彼がそう云えば私は驚いて了って彼を忽ち尊敬するにちがいないと思っているのではないかと思われて、此奴、と暫く屋敷を見詰めていたのだが、屋敷は屋敷でもう次の表情に移って了って上から逆に冠さって来ながら、こんな製作所へこう云う風に這入って来るとよく自分たちは腹に一物あつての仕事のように思われ勝ちなものであるが君も勿論知つてのとおりそんなことなんかなかなかわれわれには出来るものではなく、しかし弁解がましいことを云い出してこれはまた一層おかしくなつて困るので仕方がないから人々の思うように思わせて働けばかりだと云って、一番困るのは君のように痛くもない所を刺して来る眼つきの人のいることだと私をひやかした。そう云われると私だってもう彼から痛い所を刺されているので彼も丁度いつも今の私のように私から絶えず